
救いの手

どんぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救いの手

【Nコード】

N0308R

【作者名】

どんぐり

【あらすじ】

中学三年生の少女がしでかした、ちょっとした話。

昔、三分間のボーイミーツガール、というお題で書いたものを加筆修正した。

前篇

それなりに一生懸命だった部活も引退して、私は本格的に受験勉強に取り組まなければならなくなってしまった。中学入試とは無縁だった私にとっては初めての受験である。やや気の引き締まる思いとともに、何故かひたすら怠けたいという欲求が壊れた間欠泉のよう湧いて出て来る今日この頃だ。

ふと、私は自分の左手首が目について、思う。

今、私はなんと中学三年生。すなわち、世間が言うところの受験生というやつ。よくここまで生き延びたものだ、と我ながら感心してしまう。

夏休みは終わって、誰が頼んだわけでもなく、むしろ誰もが願うのとは裏腹に、学校は再開。そんな時期に起きた、私にとってのちよつとした事件。これは、その時のお話である。

今日は土曜日で、学校は休み。しかし、受験生である私は夕方から塾でお勉強である。休日に勉強だなんて日本の教育はいつたいうなってるんだ、とかそんなしょうもないことを考えても時間の無駄なので気持ちを切り替える。

塾は夕方からだが、まだ宿題が残っているので早く片付けよう、と思い立つ。が、気がかりなことがある。どうにも部屋が雑然とし過ぎているのではなからうか？教科書は散乱しているし、服も脱ぎっぱなしだし、机の上は物置状態だし。

これは由々しき事態である。

早急に部屋をきれいにし、心置きなく勉強に励める環境を作り上げるべきではなからうか？

そうだ。その通りだ。大事な受験勉強中に、ふと部屋の光景がみえたりして気が散ってしまったり、普段なら読みもしない読みかけの本に気を取らたりするようなことは、あってはならないのだ。

というわけで、私は部屋の掃除を開始した。何事もカタチから入るといえるのはジューヨウである。

気付くと部屋中の大掃除へと発展しているのはご愛敬、やり始めるときりがなくてなかなか掃除は終わらない。いい加減切り上げて宿題でもしようかと思いい始めたころ、背の低い本棚と壁との隙間に一枚のカードを見つけた。

昨今では何処に行こうと発行されていて、実のところ使い道はほとんどない、どこかの店のポイントカードかと思って発掘してみると、それはテレホンカードだった。

何となくだが、見覚えがある。昔、何かあった時のために、と持たされた記憶がある。知らないうちに、こんなところに入り込んでいたらしい。しかし、見つけたからと言ってどうすればいいのか。

カードに空いた小さい穴の位置からすると、残量はほとんどないらしい。もうケータイだって持っているから、テレホンカードなんていうロストテクノロジーを使うことなんてないし、こんなものは部屋の飾りにもならない。もういつそのこと捨ててしまおうか、と思うが、まだ使えると思うともったいなくてどうにも捨てられない。カードを眺めながらしばらくうんうん唸っていると、ちよつとしたいざらを思いついた。どこかの公衆電話で、適当な番号を打ち込んで、日本の何処かにいる誰かに匿名の電話をしてやろう。

なんて無駄な行為かと自分でもあきれつつ、しかしやってやろうという決意は揺らがない。

自分のケータイでこんなことをするのは漠然とした不安が残る。電話をかけるだけで莫大な請求が来るとか、気付いたら通話料金がとんでもない額になっているとか。本当にそうなることがあるのかは不明だが、気がかりではある。

公衆電話からならば余計な心配はいらない。電話代がかかると言っても、ほぼ使い道がないといっていいテレホンカードが、本当に用済みになるだけである。

これは出番を待ちながら、でもその機会を与えられることのない

テレホンカードのための救済行為であり、ちっちゃい子供たちが一度は夢想するピンポンダッシュなどの遊びとは、全くその意味合いが異なるものである。そうだ、今こそ哀れなテレホンカードに救いの手を！

……まあ、なんというか、良い子は真似しちゃダメ、といえば大抵のことは許されるのだ。
たぶん。

塾の帰り道、親には友達とちよつと寄り道して帰るから少し遅くなる、と断りをいれておいた。私の奇行にも少しばかり寛容になったとはいっても、イタズラ電話をかけて遊ぶから遅くなる、とは流石に言えない。

夜道を女の子一人でうろつくなんてちよつと危ないかな、と不安になりながらも、そのスリルがまた面白い。何かあったとしても、私の考えた宇宙人語を駆使すれば、たいいていの人間は宇宙人的な何かに恐れおののいてそのまま引き下がる、といことはすでに証明済みだ。

私は事前にチェックしておいた、近所にある数少ない公衆電話の前に立った。周りに人気は無い。

いざ、と覚悟を決めて公衆電話と対峙したのだが、私は少し戸惑ってしまった。そもそもこれはどうやって使うんだっけ？

はるか昔のその昔に思いを馳せる。私にだって、公衆電話を使ったことは在るはずだ

年齢を問われて「まずい」と思ったことはあっても「失礼な」と思ったことはないの、公衆電話の使用は客観的にはそんなに昔のことではない。でも、やっぱり私にとっては遠い昔に思えるコドモの頃のこと、そんな昔のことは水に流して忘れてしまった。

などと不毛に考えることに意味はなかった。よく見るとなんてことはなく、使い方はちゃんと書かれていたのだ。さりと読んで使い方を確認し、私はカードを取り出した。少しどきどきしながら受

話器をはずして耳にあて、カードをいれ、ボタンをランダムに押していく。

電子音が聞こえてくる。すぐに相手がでる。私は息をのんで相手の声に耳を傾ける。

「この番号は現在使われておりません」

ガチャッ ピーッピーッ

なんだかとても残念な気持ちになって、吐き出されたカードを取り出した。

それはそうだ。適当にやってもうまくいかないことの方が多いに決まっている。当然のこととはいえ、裏切られた気分でカードをニラむ。

せっかく救いの手を差し伸べたのに、その手をはじき返すとは何事か。

そんな理不尽なことを考えて、私はカードに八つ当たりする。えい、っと言って指ではじく。残念ながら返事も反応もない、ただのテレホンカードのようだ。

……これ以上やっていると虚しさに負けてしまいそうなので、気を取り直して再チャレンジ。

「この番号は現在使われておりません」

「この番号は現在使われて」

「この番号は現在」

「この番号は」

「ん」

……

自分の勘の悪さに辟易しながら、私は何度目かになる実りなき挑戦に溜息をついた。どうやら適当にやってもなかなかつながらないものらしい。虚脱感に襲われ、もうどんなに一生懸命がんばってもできないことはあるのだからやめてしまおうか、とあきらめかけた。そのとき、ふと分厚い冊子が目に入った。

電話帳である。

そう言えば、電話帳はいつも公衆電話につき従い、公衆電話のお勤めが少しでもスムーズにいくようにと尽力し、でも出番のあまりの少なさに時に脱走を試みて失敗し、地面にうずくまっているものだった。

この電話帳はどうも脱走に失敗したようである。私は地面にうずくまって、とうとうかなんだかちよつとアクロバティックな大勢で横たわり、これはむしろ出番の少なさよりもその、人間ならば体を柔らかくするためのマタワリでもやっているかのような姿勢の苦しさから、めそめそと泣いているような電話帳に救いの手を差し伸べた。

ふむ。テレホンカード以外にもまだまだ救済を望む者たちがたくさんいるのだ。なんとかして救いの手を差し伸べてやらねばならぬ。それが今を生きる私達の役目ではないか。

と、このテレホンカードでの遊びを終えたあとの次なる遊びを模索しつつ、私は電話帳を開いた。

「はい、田中です。……あの、どちらさまでしょうか？あのー、もしもし？」

中年の女性の声だった。ただのイタズラだと思ってそのうち忘れてくれるだろう。

「はい、鈴木です。……もしもし？あんただれ？なんで黙っている？なんとか言えよ！」

と若い男性。どうも機嫌を損ねてしまったらしい。すまん。

「we18hgdy9kl3rucnw0su?kaie8i
wvi0!oaprgan?」

宇宙人。ではなくて、ご老人。たぶん、男性。何言ってるのかわからなかった。マジで異世界の住人とのコンタクトに成功したのかと、焦った。私は人間とモンスターとの、世界の命運をかけた争いとか、そういったものに関わりたくはない。

「はい。さとうです。ママはいまといれにいて、パパはまだおしごとちゅうなので、あとすこししてからかけなおすといいとおもいます。それともなにかつたえておきますか？」

幼い女の子の声。年齢の割に賢くて、しっかりした子らしい。やや心が痛む。

「あ、よしりん？あたしも今デンワしようとしてたところ。なんでこーしゅーでんわ？ウワキばれないように？サイテー。キャッハッハッハ」

これも割と若そうな女性。さっきの女の子より年齢は上のはずだが、その子よりも知性を感じられない。

「はい、もしもし？……もしかして、遙か？そうなんだな？今どこにいる？もう一度やり直そう。僕が間違ってたんだ。僕には君が」
若いと中年の間のような男性。ちよっと気になったが、長くなりそうだし、真剣な割には中身のからっぽなことを延々と続けそうなので中断。おそらくハルカさんは帰って来ないだろう。

「またアンタね！？いい加減にしなさいよ！ストーカーなんてみっともない！彼は私のものよ！あんたなんかお呼びでないの！」

若そうだけどそこはかとなく過ぎしてきた年月の重みを感じていそうな女性。なんだか修羅場のようだ。悪化させてしまっただろうか？すまないとは思っているのだ。爆笑ものだったけれど。

このあたりが今日の私の成果だ。他にも老若男女問わず私の呼び掛けに応じてくれたが、割愛。こんなしがない女子中学生の呼び掛けに応えてくれるなんて、世の中優しい人が意外と多いのだなと感心した。これならば、世界平和だって夢ではないかもしれない。

テレホンカードももう本当に使い切る寸前だし、やや罪悪感もでてきたし、っというかそろそろ飽きてきたので、次で最後にしよう
と受話器を手を取った。

最後くらいちょっと近場の人にかけてみよう、自分の家と同じ市外局番を電話帳から選んで番号を押していく。

前篇（後書き）

読んでくださり、感謝します。

後編（前書き）

前篇と打って変わって、ちょっとシリアスです。
実力以上のことを書こうとしてしまった気がします。寛容に見てや
ってください。

後編

呼び出し音が鳴り始め、私は相手の応答を待つ。ここに、来てつながらない、とか、留守電、とかだったら嫌だな、と思う。思った矢先に、相手が出た。

「こんばんは。月がきれいですね。満月だそうですよ。ところで、どちらさま？」

まだ成熟しきれない幼さを残した、男性の声だった。おそらくは、少年。妙に落ち着いていて少し不気味だ。月がきれいな？

「もしかして、死神さん？」

思考が止まった。こいつ、何を言っているの？

私の困惑をよそに、彼(?)は続ける。

「そんなわけないか。死神さんなら、わざわざこのタイミングで電話なんかするはずないね。黙って見ていればいいだけなんだから」
こちらから声は出すまいと決めていたが、あやしげな雰囲気にならず声をかけてしまった。

「あんた、今何してるの？」

「知らない声だな。キミは誰?……まあ、だれでもいいや。僕は今、家のベランダに出て、夜空とか、夜景を眺めているよ」

眺めているだけ?まさかね。

「何をしようとしているの？」

「うん?ここから、飛び降りようとしてるとこ」

な、に?飛び降りる?それはつまり、

「死のうと思っさ。うち、13階だから、ここから飛び下りれば確実に死ねるんだ。飛び降りるなら学校の屋上から、つてのがセオリーなのかもしれないけど、学校に忍び込むとか面倒だし」

何をさらりと言ってのけているのだ、こいつは。死ぬ?まさか、本気で?

「本気なの?」

「もちろん。もう、生きているのはうんざりだ」

確かにこいつは言っていた「死にたい」じゃなくて、「死のう」って。「死にたい」やつらなんて、いくらでもいる。誰だって、一度は考えること。失礼かもしれないが、「死にたい」というのは実はたいしたことではないと思っている。でも、こいつはそういうのを越えて、もう死ぬことを決めてしまっている？

とんでもないことになった。ただのイタズラで終わらせるつもりが、奇怪なやつに関わってしまった。なんてご都合主義な展開だ。伏線など、いったいどこにあったというのだ。

文字盤の液晶を見る。そこには「3」と表示されている。テレホンカードの度数が通話時間にどう換算されるのか、詳しいことは知らない。が、おそらくは。

残り、3分間。

いや待て公衆電話はお金でも通話ができはず、と思ったがこれはテレホンカード専用だった。電話帳はもう閉じてしまって、番号の確認もできない。番号はもう記憶にもない。同じところにもう一度かけるなんて、もうできない。つまり。

残り3分間でこいつを説得して、自殺を食い止めなければならぬ。

なんてことだ。いたいけな女子中学生になんてことをさせるのだ。つまらないイタズラをした罰か？ いや、そんなことはどうでもいい。とにかく、なんとかしなくては。

「どうして死のうとするの？ 何があったの？」

当然ながら、説得術なんて心得ていない。しかし、やるしかない。自分の一番いいと考える方法で、なんとか説得を試みよう。

「そんなこと、キミには関係ないだろう？」

うっ、初っ端から拒絶された。

それもそうか。いきなり正体不明の他人に自殺の動機なんて聞かれて、ほいほいと答えるはずがない。どうしようか。

「そうだね。でも、私、聞きたい。これで最後なんだし、話して

みてもいいんじゃない？」

まるで自分のものとは思えぬ優しげな声音に、若干うすら寒いものを感じてしまった。とはいえ、そんなことを感じている場合ではない。

「止めようたって無駄だよ。もう、決めたことだから」

やっぱり、こいつはかなり危険な状態だ。冷静なように見えるのは、死ぬことを決めて、今までの色んなしがらみから解放されているからだろう。

「そう。ならそれでいいよ。私は止めない。ただ、どうして死のうとしてるのか、聞かせて欲しい。私はそれで満足する」

「変なやつだな。自殺の動機を聞きたがるなんて。……まあいいか。僕の最後の話し相手なわけだしね」

心の中で、うまくいった、と歓声をあげる。話を続けるきっかけはつかめた。3分持たずに会話が終了してしまっただろうでもない。

彼は穏やかな声で続ける。

「そうだな……。一言でいえば、僕は許せないんだよね」

許せない、か。死のうと思うほど、許せない何か。世の中のあり方とか、そういったものに対しての憤りでもあるのだろうか。

「……世の中が嫌いなのか？」

「……ああ、別に、世の中間違っていて、そんなくだらない世界が嫌いだ、とか言うわけじゃない。間違っているとすれば、それは僕の方。僕が嫌いなのは、僕自身」

自分が間違っている。その気持ち、わからないでもない。自分が嫌い。その気持ちも。でも、もう少し具体的なことを知りたい。

「……どうしてそう思うの？」

「……世の中正しければいいなんてことはなくて、曖昧なままでやり過ごして、周りに合わせていかなきゃいけないことはわかってるんだ。でも、僕には出来ない。どうしてもうまくいかないんだ。調子を合わせしまえばいいのに、そうしようとするほどいらだ

つ。調子を合わせることもなんて、簡単なことのはずなのに……。

僕は心が狭くて、短気で、不寛容で、短慮で、どうしようもない。僕は、社会不適合者だ」

理不尽なまでに自分を責めているらしい。思考の泥沼にはまっている。いまひとつ具体性に欠ける話なのは、何か一つの出来事として、これが一番の決定打、というものがないからだろう。様々な思いを、誰にもぶつけることができず、自分の中だけで解決しようとして、矛先を自分に向けてしまっている。

「……本気で誰かに相談したことはある？」

「そんなことしても無駄さ。笑われるだけ。誰も、真剣に話を聞こうなんて思っていない。他人のことなんて、本当はどうでもいい。君だってそうだろう？ いや、別に君を責めているわけじゃないんだ。それが当然なんだからね。そんなことは僕にとってはどうでもいい……僕は、ただ自分のことが許せないんだ。いちいちいらだってばかりいる自分。何にも出来ない自分」

少しだけ、こいつの言うことにいらだつ。なんでも決めつけてしまっているのは、まだ早い。

「……飛び降りる他にはないの？」

「リストカットとか？」

そういう意味で聞いたわけじゃないのだが、訂正する隙もない。

「手首を切ったって、ダメだ。死ぬわけじゃない。ほんの少し、気がまぎれるだけ。……って、リストカットするひとの気持ちなんて聞いても、さっぱりわけがわからないだろうけどね」

「リストカットぐらい、私だってしたことある！」

嘘ではない。手首にはキズだって残っている。もっとも、リストカットの跡だなんていったら、笑われてしまうぐらいのほんの小さなキズだけれど。でも、これは間違いなく私が私を傷つけた記録。今でも覚えてる。カッターの刃を左の手首に当てた時の、堅く冷やりとした感触。張りつめた空気。

少しだけ、カッターの刃を引いてみる。赤い線ができて、血が滲む。でも、私はそこまで。それ以上、動かすことができなかった。

あの時、私は死にたかった。それは、間違いない。でも、ダメだった。死ねなかった。「やっぱ死ぬのが怖い」なんて、思ったわけじゃない。でも、なんだかわからない、恐怖の塊のようなものに襲われて、私の手は止まってしまった。

今でも、あれがなんなのかはぼんやりとしかわからない。

もしかしたらあるのかもしれない、今よりましな未来を失ってしまふことへの恐怖。そんなものもあっただろう。私にだってあった、無条件に楽しかった日々の思い出が、こんな悲しい未来に集約してしまうことへの恐怖。こんなものだって、きっとあっただろう。

他にも、うまく形にならない何かがたくさんあった。そして、それが結局「死ぬのが怖い」ということなのかもしれないと、今では思っている。

「世の中にはね、本当に死にたいと思っている人間なんて、一人もないの。自分の願う通りに生きたくて、でもそれができないのが苦しくて、生きたい気持ちが強すぎて、死にたくなるの。死ぬほど、生きていきたいの」

いきなり何を言い出すのか。

これが間違っているとは思わないし、少なくとも私はそうだった。でも、これが今のこいつにどれだけの意味を持つだろう。きっと、なんにもならない。理屈に意味は無い。

だから、私は続ける。

「自分が間違ってる？ そんなことない。間違ってるのは世の中の方。世の中間違ってるとって、そう思うのが正しいのっ。

本気で話しても笑われるだけ？ そんなの気のことない！ 本気の人間を笑えるやつらなんて、そもそもたいした人間じゃない！ そんなやつら相手にするな！ 本気の意味が分かる人は、本気なひとを笑わないっ。真剣に向き合うのは、そういうひとたちだけでいい！」

まずい、時間がない。表示は「1」。あと何十秒？ それとも何秒

？もっと細かく表示してくれ。

相手の話を聞いている余裕もない。とにかく自分の思っていることを喚き散らす。

「あんたは本当はいろんなことに対して憤っていて、でもそれは他の人なら気にも留めずに流してしまふことだったりするっ。憤るのは短気だと心が狭いとかそんなことはなくて、それは大切な正義感！おかしいのは何にも気にしない無関心なやつらの方！おとなしくカッコつけて、自分が変だなんておとしめるな！おかしいのはお前らの方だ、って胸張って叫べ！」

私が本当に言わなきゃいけないことは、これじゃない。

「とにかくこれだけは聞いて！」

あと一言

「私あんたが死ぬなんて嫌だ！」

そう言いきったとき、電話が切れた。時間切れだ。なんだか脈絡もなく、まとまりのない話をしてしまったような気がするが、何を言ったのかほとんど忘れてしまった。ただ、最後の一言は、ちゃんと言えた。彼がちゃんと聞いていたのか、どう受け取るかもわからないが、私にとっては大事な言葉。

思考を整理しよう。まだ混乱の残る頭で考える。

不特定多数の誰かに向かって言う、「自殺はダメです」なんて言葉にはなんの力もない。馬鹿にしているとさえ思う。何もわからないくせに、何にもできないくせに、なんとなくわかったような口で呼び掛けて、結局本気で向き合うわけでもなくて、死にたいという気持ちで軽んじる。

本当は違うのかもしれない。本当にたくさん、死にたいと思う人々を救いたくて、実際に救ってきた人が言っているのかもしれない。でも、そんなことは関係ない。本当のことなんて、わかるはずがない。本当か嘘かわからないような言葉に、人を動かす力は無い。それに、「みんな」への言葉なんて無意味だ。その「みんな」に、自分は含まれない。そう思うからこそ、死にたい気持ち。それよ

りも、「みんな」でも「誰か」でもない、「あなた」として真剣に
対峙してくれるひとに、死なないで、と言って欲しい。理屈どうこ
うじゃなく、その一言で十分だ。もっとも、私は「死なないで」と
は言わなかったけれども。

他の人は、私と似たようなことを考えるのだろうか？カードを吐
き出しながら、ピーピーと餌を待つ小鳥の様に喚いている受話器を
前にして疑問に思った。

死にたいと思う人との交流は、私にはなかった。だから、自分以
外のことはわからない。私も、ただわかった気になっているだけだ
ろうか。

カードを抜き取って、最後の務めを終えたそれを眺める。ゼロの
所に、ぽつんと穴が開いていた。

ゼロ。空っぽ。大往生。

「お疲れさま」

何となく、そう呟いた。呟いた後、なんだかんだでおそらく十年
くらいは、このカードは私と共にあったのだと気付いた。

「まるで幼なじみじゃん」

なんて事を、柄にもなく思った。

しみじみとした心で、最後の台詞を思いだす。「あんたが死ぬな
んて嫌だ」と私は言った。どうしてこんなことを言えたのだろうか？
本心なんか関係なく、ただこれを言えばいいと思って言ったわけ
じゃないはずだ。だって、私はあの時本心からそう言っていたのだ
から。

「……ああ、そうか」

ちよつと考えて、わかった。

難しいことなんて何もない。赤の他人で、自分とまったく関係な
くて、でも、私と3分間も会話をた、あいつが死ぬのは嫌だった。
ただ、それだけだ。

あいつはいったいどうなっただろうか。無事に自殺を思いとどま
ってくれたのだろうか。それとも……。

しばらく電話の前でうんうん唸っていたが、決めた。

「もう知らん」

そう捨て台詞を残し、私はその場を後にする。

「はあ」

溜息を一つ。

たった3分間で、私は一日分以上のエネルギーを消費してしまったような気分だ。そんなんだから……両親の待つ家が恋しくなってしまった。

「今日の晩御飯はなんだろうな」

夜道を軽快に歩きながら、歌うように呟いた。

月日が経つのは速いもので、私はついに高校生になった。思いだすのは、受験の日の絶望的な気分。まるで、レストランでの食事の後、財布を持ってきていないことに気付いたときのような気分だった。

ともあれ、振り返るとなんだかあっけないものだ。

結局、あいつがどうなったのかはわからない。あの日の夜は不安で、「本当に死んでしまったらどうしよう？ やっぱり、ちょっと無理してでも電話帳から電話番号を探し出して、電話をかけ直すとか警察に届けるとかすればよかったかな？ いやいや、でもでも」とか初恋の人を思う無垢な少女の様に気色悪いくらい悩んでしまった。

とりあえず、次の日にもそれ以降にも、ニュースで13階から飛び降り自殺、とは報じられなかったので、たぶん大丈夫だろう。

となると、それはそれで少し不安になる。そもそもあいつは本当に死ぬつもりだったのだろうか？ 私は本気だと思っていたけれども、実はちよっとした気の迷いでしかなくて、私がわざわざ熱く語らなくてもよかったのではないか。

それはちよっと恥ずかしい。いや、ちよっとどころじゃなく恥ずかしい。マンホールの蓋をこじ開けて、その中にダイブしてしまいたくなるほど恥ずかしい。

私はあの時いったいなんと言っただろうか。なんだかものすごく恥ずかしいセリフを口走ってはいなかっただろうか。まさか、君の瞳に乾杯、とか、君さえいれば何もいらぬ、的な妄言を勢いに任せて口にしていたとか？ まさかね。

また性懲りもなく悩んだが、これまた甲斐性もなく、もう知らんと投げた。

高校生活初日。新入生オーラを後光のように発散していてやや見るに堪えないクラスメートたちとは、明らかに違う雰囲気を持つ少年を見つけた。教室の一番後ろ、廊下側の窓際。

どす黒い前髪は目にかかるくらいまで伸び、陰鬱そうな雰囲気さらに助長している。さらには、彼は不機嫌な様子を隠そうとせず、視線を他の人がなるべく視界に入らない位置に固定していた。

寄って来るな、と暗に示しているようだし、他のクラスメートも彼には近づかないようにしているようだ。

私は少し気になって近づいていき、彼を観察する。制服の袖で隠れていてよく見えないが、左手首にキズがあるように見える。そのキズを見つめていると、彼は不快そうに私を睨んだ。

私は、彼を見返す。私はこの程度では怯まない。

意外といい顔してるな、とか場違いにも頭をよぎったのは思春期のなせる技だ。

もしかしたら、全くの別人かもしれない。なんだかどきどきしてきた。

私は視線を自分の左手首に落とす。そこには、ちょっと人には語れないキズ。そして、もう一度彼に視線を戻し、少し笑って、その手首を彼に見えるように突き出す。転んだひとを助け起こすために、手を差し出したような形になった。

彼は一瞬不審なようすで私を見て、そして今度は心底驚いたようすで私を凝視する。何も言葉にはしなかったが、どうやら伝わったらしい。

さて、どうしたものか。

なんと言葉をかけてやろう。はじめまして、とか？生きてたんだね、とか？それとも、捨てるつもりで使い切った、だけどあまりにも強烈な出来事のために捨てることができなくなってしまった、あのテレホンカードを見せて、あの日の出来事を語って、あんたのせいで大変だったと責めてやろうか？

おそらくはとてつもなく恥ずかしいセリフを聞かせてしまったであろう相手に、どうやって話しかけたものか。

私は途方にくれてしまい、どうやら彼もなんと言っていないかわからず茫然としている。

口を開こうとしては、それ以上のことが出来ずに口を閉ざす。そんなことを、時間を忘れて繰り返した。なんて馬鹿なんだろう。

結局、これは後々しようもない語り草になるのだが、私と彼は、なんとたっぷり3分間も見つめあってしまった。

後編（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0308r/>

救いの手

2011年10月8日19時17分発行